旅

入賞作品

第1回プチコンテスト応募作品

2015-05-01～6-30

Novels

かわいいエルフには旅させよ
作：因幡雄介

ドラゴンパピーのお父さん	作：たかつ
がんばれ御堂筋 健太 番外編 健太の出張	作：ひつじまる
不思議の国は夢オチだから大丈夫	作：よたか
兄を探して	作：設楽夏樹
卒業	作：あんなか

Illust

異世界の友よ
作：キャラクター

田舎みち	作：だすとぼっくす
月夜の旅立ち	作：阪 茉季穂
弟を見つけるまで	作：まぐ
まだ見知らぬ場所へ…	作：Dande らいおん

MiRACREA

© 2014-2015 MiRACREA

目次

表紙 1
まえがき 3
著作権保護について 4
カシキャラ紹介 5
本編 13
異世界の友よ 14
かわいいエルフには旅させよ 16
プロローグ 17
風船の国(1) 21
風船の国(2) 27
お菓子の国(1) 33
お菓子の国(2) 37
壁の国(1) 41
壁の国(2) 44
エピローグ 48
奥付 54
裏表紙 55

まえがき

第1回 プチコンテスト入賞作品

●イラスト部門

「異世界の友よ」作者:キャラクター

●小説部門

「かわいいエルフには旅させよ」

作者:因幡雄介

STOP

COPY

この作品はソーシャルDRMの技術により
著作権保護処理がされています。

購入者情報

KASHI-CHARA書籍

info@mira-crea.com

カシキャラ紹介

セ シ ル

性別	女性
血液型	A型
誕生日	1/22
身長・体重	155cm,45kg

幼い頃から本を読むことが大好きだった、一国の姫。年の離れた二人の姉がおり、セシルはあまり表にでていなかったため 国民からは謎の多い姫と呼ばれていた。しかしある日、隠されていた氷の魔導書を見つけ、力が暴走。たちまち辺り一帯は氷付けになり、彼女は自らの国を滅ぼしてしまう。謎多き姫は、国民から、災厄の姫などと非難されひどい言葉を多く浴びせられるように。セシルは大きな責任を感じ、国を取り戻すために旅を始める。

ネイザン・ハワード

性別	男性
血液型	たぶんAB
誕生日	1580年ごろ生まれたらしい。月日はキリストと同じと本人は言っているが絶対嘘
身長・体重	180センチ・68キロ前後

青年に見えるが実は400歳越えの老獪な英国紳士。表向きは英国領バミューダ島の領主にして男爵で、
海軍人一家ハワード家の泣く子も黙る鬼家長。しかしその正体は、大昔に聖杯を守る少女によって
不本意にも不死にされた、不死身の聖杯の騎士である。勝手に不死にされたことを深く恨んでいる反面、
薄幸美少女姿の主人を守るためなら、なんでもやってのける冷酷な犬。
しかし主人はいつも厳しくつれないので、ひどくぐれた時期もあるらしい。
十三番目に騎士に序せられ、「ガラハッド」のコードネームを持つ。
聖杯を持つ主人を守るべく、年の功と豊富な人脈と莫大な財力で
英国議会や軍隊を動かし、情け容赦なく「敵」を排除する。
※かつてトラファルガーの海戦に参戦、大活躍して
バス騎士の十字勲章と赤ローブをジョージ三世からもらっている。

電々犬

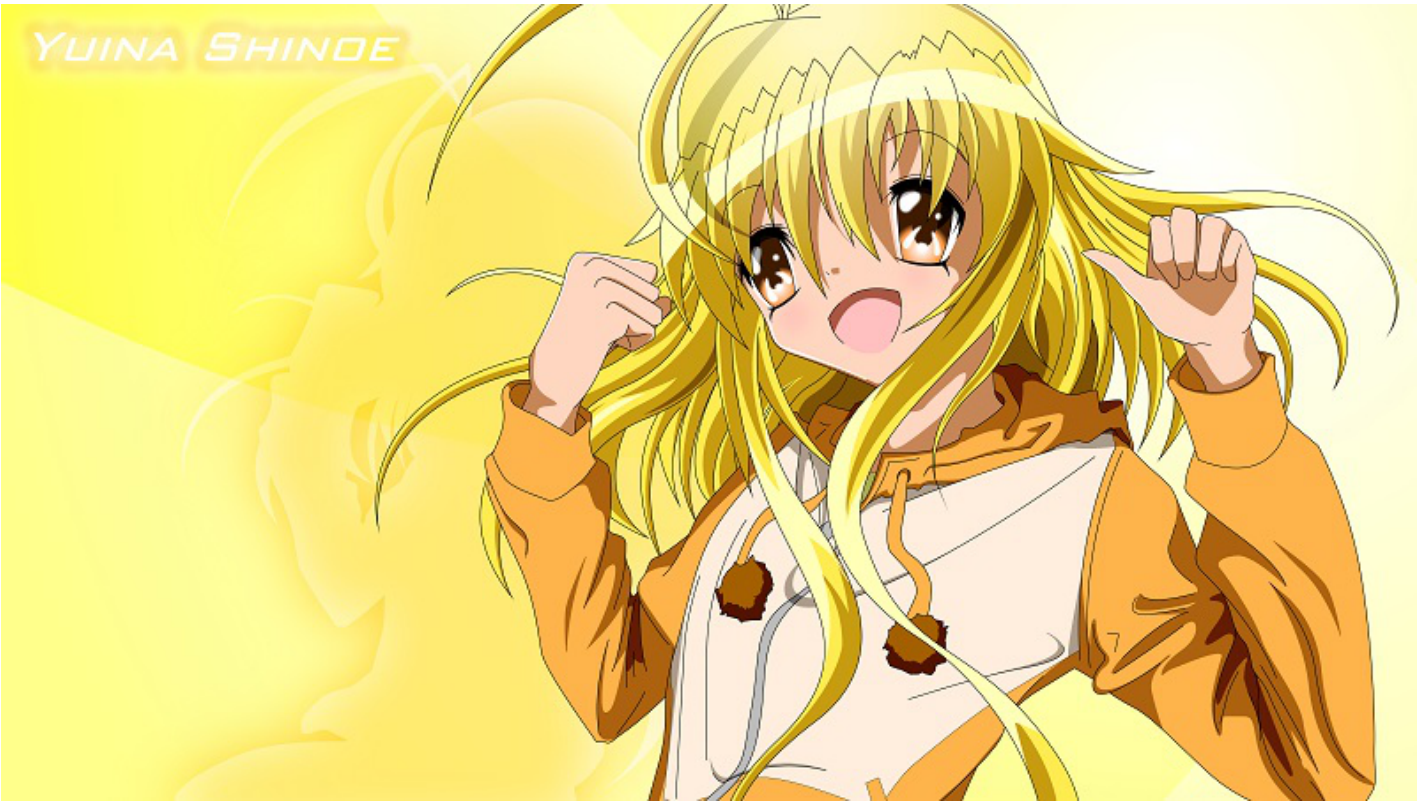
性別	男性
血液型	不明
誕生日	1961年2月27日
身長・体重	175cm

旅人は、訪れた町で知らずの内に彼と出会うかもしれない。
勘の良い者ならば、もしやすると気づく者もいるだろう。
目の前にいる人の形をしたソレは、ただ無邪気な好奇心を持って、しかし気まぐれに接触してきたことに。
そして、ここから一秒でも早く立ち去るべきだということに。
なによりも、たとえソレが一時でも付きまとえば、一人の人間などそれだけで滅ぼされてしまうということを。
彼の名前は通称、電々犬。何処からともなく、人知れずひっそりと町に住み着き、
その町を繁栄させては最期には破滅させる性質を持つ憑物の妖怪。
彼の場合は人に取り憑くのではなく、主に町そのものに憑く。犬の姿にもなるが、男性の人の姿を好む。
正体を現した際には、赤黒い髪に耳を生やし、背には朱色の刺々しい奇妙な羽を持つ。
彼自身は人間に興味があるので、気まぐれではあるが人に化けて対話を試みようとする。
飽き性。物覚えは良いが、知性的ではない。放浪癖が強く、飽きるとすぐに町を移動する。
そのため彼によって大規模な盛衰をもたらされる町は少ない。

佐 伯 涼

性別	男性
血液型	A
誕生日	2月13日
身長・体重	178

28歳、チーフエンジニア。メガネ、長身、痩せ型、黒髪、短髪。ペットは猫の小寅(虎猫)。学生時代にオーストラリアで環境ボランティア活動を行う。弱度の潔癖性。



篠 枝　結 奈

性別	女性
血液型	O
誕生日	7月28日
身長・体重	148cm , 37.2kg

いつも活発で元気な、2本のアホ毛を持つ女の子。積極派で一度決めたことは絶対やめないという太い心を持ってる。スポーツが得意な反面、勉強は苦手の運動系女子。
体を動かすことに関しては異常に飲み込みが早いが、逆にそれ以外は飲み込みが遅い。
みんなをまとめられるリーダーシップな面もあり、常にみんなを引っ張る原動力となっていることが多い。暴力にも屈しないほど心が強く、だがしかし一度自分を否定されるとすぐ何もできなくなるほど弱い部分もある。好物はオレンジパフェ。両親とは幼い頃に死別しており、父型の祖父に引き取られて暮らしている。
その時に大人から自身の存在を罵倒されたトラウマを抱えてしまっている。

天 井 モ モ カ

性別	女性
血液型	AB型
誕生日	3月3日
身長･体重	163cm

超がつくほどの天然。どんなに突拍子もないことだろうとすんなり受け入れる。かわいいものや人が好き。弟がいる。

ニア

性別	女性
血液型	O型
誕生日	5月7日
身長・体重	身長155cm/体重43kg

エルフの女の子。草木を操る力を持っている。なので、歩けば足下から植物が生えてくる。エルフだが人間は好きで、普段は森の中に住んでいるがよく人里にも現れ、森の果物や草花を人間に売りながら、コミュニケーションをとっているので、人間とも仲がいい人気者。
性格は穏やかで、人懐っこい。いつも笑顔を忘れない子。

第1回プチコンテスト入賞作品

異世界の友よ

第1回プチコンテスト イラスト部門優秀作品

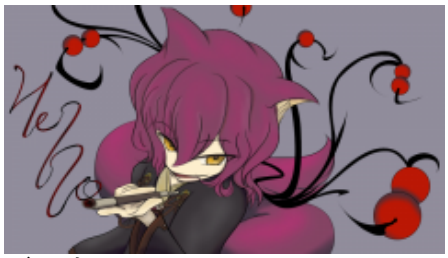
作者: キャラクター

別々の世界のカシキャラたちが集い、パーティを組み、いざ冒険へ!

この作品に登場するカシキャラ

セシル

ネイザン・ハワード


電々犬

佐伯涼

篠枝 結奈

天井モモカ

かわいいエルフには旅させよ

第1回プチコンテスト 小説部門優秀作品

作者: 因幡雄介

『かわいいエルフには旅させよ』代々受け継がれたこの言葉に従って、エルフのお姫様ニアは、女王候補となるべく『黒い大陸』を旅することとなった。誰もが成しえなかった大陸横断に、ニアは変態紳士リョウクと共に挑戦する。そこで待っていたのは、風変わりな国と人々だった――。

この作品に登場するカシキャラ

ニア

プロローグ

死体が、川を流れている。

それをエルフの少女が、あぜんとしてながめていた。

少女の名前はニア。ヒマワリのように輝く金髪に、若葉のような緑の瞳を持っていた。格好は、エルフの民族衣装で、旅をする時に身につけるものだ。見た目は人間の少女でいうと、十六歳前後。朝露が葉を伝って流れるように、その目には涙が浮かんでいる。

「おい、今度の死体は赤い服を着てるぜ」

「本当だ。くっそー」

「俺の勝ちだ。ははっ」

川べりで、人間の少年たちがはしゃいでいる。

彼らは死体の服の色を賭けて、遊んでいるのだ。その表情に、ニアのような悲愴感はまったくない。

次の死体が流れてくる。まだ遠くにあり、服の色はわからない。

「う～ん。灰色」

「俺は青」

「そうだな、俺は黄色」

また賭け事が始まる。

ニアはその無神経な態度に、彼らをにらんだ。

怒りの感情が、血に溶けて体中を回る。

「――黒、だな」

少年たちに混じって、男が急に前に出てきた。彼も人間だった。突然出てきた変な男に、少年たちはビクリとなる。

死体が流れてきた。腐敗ガスが充満して浮くその姿に、皆の視線がいく。ボロボロに破れた上着は、黒色をしていた。

「俺の勝ちだな」

男は静かに言った。

少年たちは賭け事に負け、さらに大人が出てきたことによりしらけてしまい、その場から立ち去った。残ったのは、ニアと男の二人だけだった。

「……教えて、リョウク」

ニアは、男の名前を呼ぶ。

リョウクという人間の男は、黒髪に黒目、腰には剣をたずさえていた。一応顔は整っており、眉は斜めに細く、眼光は鋭い。年齢も二十歳と若かった。ただ、多少性格に難があった。

「なんでしょう？ ニア様」

リョウクはニアと同じ、死体が流れる川を見つめながら言った。

「どうしてこの国の人々は、死体を川に流しますの？」

震える唇で、ニアは聞いてみた。ほんの数日前までいた『光の大陸』では、絶対に見ない光景だった。初めての旅で、いきなり衝撃を受け、動揺が激しくなっている。

「この国の人々は、高い土地代を払えないのでございます。それで、死者を弔う墓を作ることができません。火葬や土葬は禁じられているので、川に流すしかないのでございます」

リョウクは丁重な言葉で話した。

「そんな……。そんなこと、間違ってますわ」

ニアはそう言うと、川に足をつけ、中へと入っていく。

「ニア様？ なぜ川の中へ？」

「あの死体を引き上げますの。きちんと弔ってあげたいから」

ニアはずんずん水の中へと侵入した。

「ニア様。やめたほうがいいと思います」

「どうしてですの？
死者を川に捨てるなど、冒涜しています。あれでは彼らも浮かばれないでしょう。私が供養します」

「いや、そうではなくて。その川、深いですよ？」

「へっ？ きゃっ！」

足に重りがなくなった。ニアは水に食われ、体内に押し込められる。

「ぷはっ！ はっ、早く言って……うっ」

ニアの鼻に、つんとした腐敗臭が入ってくる。

川はドブの味がした。

目の前を、黒いミミズが楽し気に踊る。

――……最低！

ニアは吐き気を我慢しながら、そう心の中で叫んだ。こんな旅など出なければよかったと、後悔した。だが、そんな黒い感情も、意識が失われていくうちに消失していく。

――ああ、どうしてこんな所、来たのでしょう……。

ニアは抵抗をやめ、よどんだ川に流されていく。

意識がなくなり、闇が訪れた。

まさしくここは『黒い大陸』だと、ニアは思った。

風船の国（1）

ニアは、生まれた時から人間となじんでいた。

生まれた場所は、『光の大陸』のエルフの国。

そこに君臨する王の娘なのだ。つまり、王女なのである。

彼女はたまに人間のいる里に下りては、子供たちと仲良く遊んでいた。この大陸には、人間の他に亜人も多いので、皆特に珍しがることはなかった。むしろ、高貴なるエルフの娘、しかも王女なので、気を遣っていたぐらいだ。

そんなある日、父親であるエルフの王に、玉座がある部屋まで呼び出された。いつもしている気楽な格好をやめ、宝石をちりばめたティアラをかぶり、胸を大きく開けたドレスを着させられる。そ

して王の前でスカートを両手で広げ、丁寧にあいさつした。

「ニア。まだ若いが、今のうちに世界を見ておくのもいいだろう」

美しく育った娘に向かって、王は灰色のひげを手でさすりながらしゃべった。

先祖代々王族が行ってきた女王になる前の儀式、『かわいいエルフには旅させよ』という意味だ。

この言葉は今でも伝えられ、伝統行事にまでなっている。

「わかりました。お父様。ニア、旅に出ますの」

ニアは特に嫌がるそぶりを見せず、すぐに返事をした。

人間は好きだし、誰とでも仲良くなれる性格なので、旅に出るのは苦痛ではなかった。それに、旅は女王になるための試練。二十九人いる女王候補の中から選ばれたのだから、光栄なことなのだ。もう心臓がドキド

キしている。

「それで、ニアはどこに行けばいいんですの？」

「うむ。実は、この世界には大陸が二つあってな。『光の大陸』と『黒い大陸』があるのだ。他の娘たちは『光の大陸』を旅させようと思うが、お前はその社交的な性格からして、『黒い大陸』でもうまくいくだろう」

王は期待を込めて言った。

「黒い大陸？」

ニアの目が丸くなった。

黒い大陸とは、女王候補を挫折したエルフが言い出した大陸の名前だ。

光の大陸とは違い、異質な国々や人々が住んでいる。つまり、光の大陸の常識が通用しないのである。

そのためか、黒い大陸を横断できたエルフは、すぐ女王に即位できる。しかし、誰も挑戦しない。しても泣きながら、光の大陸に帰ってしまう。

王は意地悪でニアを送り出すのではなく、女王としての評価を上げたいのだ。それほど、ニアは女王となる適性があった。他の女王候補たちとのあつれきも、この実績があれば解消できるだろう。

ニアの表情が、明らかに青くなっていった。

「あっ、あの、お父様。私一人で、その大陸に行きますの？」

「いや。実は黒い大陸を旅した、風変わりな人間がいてな。その者に、案内させようと思う」

王が両手をたたく。

それに反応した召し使いが、部屋にある大きな扉を開いた。

そこには、見覚えのある人物が立っていた。

「リョウク！」

声を上げると、ニアは王の目の前にもかかわらず、男のそばに向かう。

リョウクは小さな頃、よく遊んだ男の子の一人だ。五年ぶりの彼は、背が高くなり、りりしく成長していた。まさか、あの黒い大陸を旅していたとは知らなかった。

「お久しぶりです。ニア様」

精神的にも成長しており、目上の人間にひざまずく。礼儀正しい姿勢だ。かわいい娘との同行を、王が許すのもわかる。

ニアはその態度に好感がもて、人間の少女が好きな男の子にするような、かわいらしいしぐさをしてみせた。年頃の娘なので、異性がどんな反応するのか見たいようだ。「美しくなりましたね」

という言葉を期待する。

「お久しぶりですの。リョウク。元気にしてた？」

「ええ。おかげさまで」

「背が高くなりましたね？」

ニアがそう言うと、リョウクは王に聞こえないように、そっと長い耳に口をよせた。

「ニア様こそ、おっぱいが大きくなりましたね」

「……」

下品な言葉に、ニアの口元がひきつる。

――思い出しましたわ。この男、平然と汚い言葉を使う男でしたわ。

子供の頃は、よくそれでからかわれたことを思い出した。本人に悪気はないのだ。気に入った女の子には、必ず言うあいさつ言葉だった。

リョウクのその性格が、ニアは好きにはなれなかった。

「ニア様」

リョウクの声が聞こえる。

「ニア様」

過去の記憶から呼び戻される。

ニアは両目を開いた。

「はっ……ここはどこですの？」

起き上がると、リョウクがそばに座っていた。

空が、布のようなもので覆われている。

「ここはテントの中でございます。ニア様が川で溺れて気絶している間。このリョウクが背負って連れてまいりました」

リョウクは腰を曲げ、頭を下げた。

ニアは、死体が流れる川を、頭の中でよみがえらせる。そういえば、死体を引き上げようとして、川で溺れたのだ。

「そう……あっ！」

やけに寒いと思ったら、服を着ていなかった。

耳たぶまで真っ赤にし、かけられていた布で裸を隠す。どうしてこんなはしたない姿なのか、目でリョウクに訴えた。

「服はこのとおり、乾かしてそこに置いてあります。ニア様の胸は、このリョウクが、たっぷりと堪能させていただきました」

リョウクの白い歯が、満足気に輝いている。

「ひっ、ひあ……」

裸を今まで殿方に見られたことのないニアは、どうしていいかわからず、ただ顔を赤くした。

「さっ、ニア様。服をお着替えになり、テントの外まで来てください。私は先に出ております」

あまりにも普通の態度で、リョウクはテントから出て行く。

残されたニアは、じょじょに怒りがこみ上げてきた。

――最低な男ですわ！

ますますリョウクのことが嫌いになる。死刑にしてもいいくらいだ。どうして黒い大陸の案内人が、あの男しかいないのか。

とりあえず感情を抑え、服を着替え、テントの外に出る。そこでは、空が広がっていた。ポツリポツリと、灰色の地面があるだけだ。まるで、空を浮いているような錯覚がする。

リョウクが地面の端に立っている。手には、二つの細長い糸を持っていた。その先はゴムボールのように丸く、宙を浮いている。

「……リョウク、ここはどこですの？」

裸を見られた怒りを含めながら、ニアはリョウクに話しかける。だが、元来人がいいので、その感情は伝わっていない。

「ここは『風船の国』です」

リョウクは手に持っている、細長い糸を差し出した。丸い風船がついた糸の先には、フックがついている。

ニアはそれをおとなしく受け取った。赤い風船を見上げる。

「風船？ これのことですの？」

「そうです」

リョウクはそう言うと、フックを腰のベルトについている、輪っかにつける。

ニアはようやく、自分の服にもベルトが装着され、リョウクと同じような小指サイズの輪っかがあることに気づいた。着替えている時は、感情が高ぶってそれを見てもいなかった。

「ニア。俺と一緒に――これで空を飛ばないか？」

「なっ……」

それは愛の告白に近いせりふだった。

――この男……いったい何を言ってますの？

さすがに受け入れられなかった。

風船の国（2）

風船が風に、ゆらゆらと揺れる。

しばらく時間が経過した後、ニアはゆっくりと口を開いた。

「あの、その風船で、飛べと？」

「ええ、そうです」

間髪をいれず、リョウクが答える。

「あっ、あの、風船を体につけて、空を飛ぶんですわよね？」

もう一度、ニアが確認する。

「そうです。このベルトに風船をつけて、空を飛ぶのです」

リョウクは間違いなく、この細い糸を体につけて、頭ほどしかない風船で、空を飛べると言っている。

「それはちょっと……無理なのではないかしら？」

ニアは困ったように笑う。『常識』で考えればそうだ。

「そもそも、どういう原理で飛べるのです？」

「ではニア様。どうしてハーレムモノの物語で、男が意味もなく美女にモテモテなのかごぞんじですか？」

「えっ？ 知りませんわ？」

唐突な質問に、ニアは答えられない。そんな小説、読んだこともない。

「男が美女にモテるのに――理由はないのです」

リョウクの言葉には、力がこもっていた。

――……いっ、意味がわかりませんわ。

言葉につまるニア。

「ご覧なさい、ニア様。人々はあのように、空を飛んでいるのです」

リョウクが空に向かって、手を差し出した。

どうやら、どこかの高層建築物の屋上にいたようだ。

並んだ窓だらけの世界が、ニアの瞳に映る。

「わぁ……」

ニアは見たこともない世界に、声を弾ませる。風は優しく、金色の髪をなでてくれた。

「さあ、飛びましょう」

リョウクはすっと、ニアのベルトに風船をつけた。

すると、体が浮き出し、本当に空に向かって飛び立つ。ニアはまるで風になったような、心地の

良い気分になる。

「すごい！ 本当に飛んでますわ！」

興奮して、ニアは叫んだ。

この国は、高層建築物がたくさんある。人々はさまざまな色の風船をつけ、建築物の壁際を浮き、窓から家に帰っている。食料を入れたカゴを持ち、風に任せるまま商売をしている者もいた。

子犬が空を飛んでいる。首輪と手綱をつけているので、飼い主と空の散歩をしているのだろう。

ベルトを胴に装着し、「へっへっ」と舌を出しながら、水で泳ぐように犬かきをしている。その姿がかわいらしい。

「リョウク！ ほらあそこっ！ ワンちゃんが空を飛んでますわ！」

ニアがリョウクの方を見た。

「はい、ニア様。白いモノが丸見えです」

リョウクはニアを見上げたまま、ぷかぷか宙を浮いている。ちょうど真下にいた。

「えっ？ 白いモノ？ なんですの、それは……はっ！」

ニアは、丈の短いスカートをはいていたことに気づく。

隣を通り過ぎていく、青い風船をつけた長ズボンの女性が、クスクスと笑っていた。

そういえば、風船をつけて空を飛んでいる女性で、スカートをはいているのは自分だけだ。

顔がどんどん熱くなっていく。

「きゃあああっ！ 何のぞいてますのっ！」

ニアはスカートで、下着を隠そうとした。しかし、なかなか思うように、体が動かない。まだ、風船をつけた浮遊に慣れていないのだ。

「ご安心ください。ニア様の下着を見ていいのは、このリョウクのみ。害虫どもから守ってみせます！」

がっしり拳を握りしめ、そう誓うリョウク。

「カッコいいせりふですけど、根本的に変態発言ですわっ！ ……うん？」

ニアの視線が地上に落ちた。

建築物が建てられている地上で、赤いトマトがつぶれたような跡がある。

近くでは、風船をつけた、がっしりとした体格の男性が、長い袋を肩にかついでどこかに向かっていた。

「あれは、なんですの？」

「死体でございます。風船が割れて、地上に落ちたのでしょう」

リョウクの言葉に、ニアは息を飲み込んだ。男にかつがれている袋の長さは、ちょうど人の背丈と同じだった。

「どうして、風船が割れますの？」

「原因はいくつか考えられます。カラスに割られた。ぶつかった瞬間ベルトが外れた。風船の寿命が短かったなど、さまざまです」

リョウクは淡々と答える。ショックを受けているニアとは、対照的だった。

「そんな……」

「大丈夫でございます。私たちがつけている風船は新品で、壊れることは」

「そんなことではありませんわ！ こんな危険なものをつけるより、地上を歩いた方が……そうですわ！」

良いことが、ニアの頭の中でひらめく。

さっそくリョウクを連れ、高層建築物の屋上に下りる。

そして、風船で浮かぶ人々に向かって大声で訴えた。

「みなさん！ 風船を捨てて、地上を歩きましょう！
足腰を鍛えられますし、運動にもなります。私たちには、足があるのですから！」

ニアの明るい声に、皆興味を持って近づいてきた。相手が光の大陸から来た、高貴なるエルフだと知ると、ますます話に耳を傾ける。最近墜落死が多いのか、ニアに賛同する者まであらわれた。

ニアは、これで生活態度が変わると思い、安心してテントの中で休むことができた。

次の日。

「どうして……」

ニアはあぜんとした。

人々は、『風船をつけたまま』地上を歩いていた。

ニアが理想とした『風船を外して』地上を歩く者はいなかった。

「あっ、あの！」

歩いている白髪の老人に話しかける。高齢のためか、シワが深い。

「おお。あんたは昨日のエルフちゃんじゃないか？ どうしたかの？」

「みんなどうして、風船をつけて歩いてますの？ それじゃ、意味がありませんわ」

「どうしてかと言われても……この国は高層建築物が多くての。皆風船をつけて空を飛ぶことは、危険じゃとわかっているが、やめられんのじゃ。ワシみたいな老人だと、歩くのもめんどくさいわい」

「そんな……めんどくさいからって……」

「安心せい。ちゃんとみんな、お嬢ちゃんの言うことを守っておるわい。地上を歩くなぞ、久しぶりじゃ。ほっほっほっ」

老人はふわふわ歩きながら、空を軽快に飛び跳ねていた。

ニアは去っていくその後ろ姿を、黙って見守るしかない。

「ニア様。人は、一度手に入れた、利便性の良いものを、たとえ危険だとわかっていても、手放すことはないのです。彼らはニア様の言葉を忘れ、また空を飛び始めるでしょう。――それが、死と隣り合わせだと知っていても」

リョウクはニアの隣で、静かに言った。

ニアはぼうぜんと、建築物の壁を、上っていく人々をながめていた。

まるで――風船が人の魂のように見えた。

お菓子の国（1）

ニアとリョウクは黒い大陸にある、次の国に入った。

途中、馬を買い、荷物を運んでもらう。たてがみや皮膚が黒く、鼻づらだけは灰色の馬だ。

ニアは、馬の操作ができないので、手綱をにぎっているリョウクの背中にくっついていた。

「なんですの？ すごく甘い匂い」

ニアは鼻をクンクン鳴らす。

この国は木造建築が多い。木の壁は黒ずんでいるが、町の人は気にしていないようだ。

「ニア様。この国は『お菓子の国』でございます」

リョウクが馬から下りた。次にニアを下ろす。

ニアは馬から離れると、お菓子が置かれた店を回っていく。ゼリー状のお菓子や、粉を固めて平たくしたもの、ひものついたあめなど、さまざまな種類がある。液体を瓶につめた、色彩豊かな飲料水タイプは、光の大陸にはないので、ニアは目をパチパチさせていた。

「へぇ、おいしそう」

「食べてみますか？」

「えっ？ お金はありますの？」

「大丈夫です。この国は安くお菓子を販売しているのでございます」

リョウクは、さっそくお菓子を買ってきた。

それは透明なチューブに、ゼリーが入っているタイプだった。

ニアは腸詰めのソーセージを思い出す。

「どうやって食べますの？」

「はい。このお菓子はこのように、歯で食いちぎるのでございます」

リョウクはおいしそうな緑のゼリーが見える、チューブの端を歯で食いちぎった。端が破れると、ゼリーが出てくる仕組みのようだ。それを口につけ、吸い出す。

「そんな食べ方しますの？」

甘い匂いのせいか、唾液でいっぱいになったニアは、さっそくリョウクをまねてチューブの端に歯を立てる。しかし、なかなか食い破れない。

「私の力では……食べられませんわ」

「貸してください。私がやりましょう」

ニアからお菓子を受け取ると、リョウクはあっさりチューブをかみ破った。

「わぁ。ありがとう、リョウク」

子供のように喜び、ニアはリョウクからお菓子を受け取った。ぷるぷる震えるゼリーを食べるため、口を近づける。垂れるロングの髪を手でかき上げ、イチゴのような唇がお菓子に触れるまでもう少しだ。

「どういたしまして。ニア様――間接キスですな」

リョウクのぼそっとしたつぶやきに、ニアの唇がゼリーのすぐ前で止まる。お菓子を口から離すと、リョウクにそれを渡した。

「これはあなたが食べてください。他にありませんの？ お腹がすきましたわ」

「ええっ？ なっ、なぜ？」

ちょっとショックを受けるリョウクだった。

その後もお菓子を購入し、ニアとリョウクは色と味を楽しんでいた。

馬はニアからお菓子を与えられ、ペロペロ舌を出し糖分を摂取する。

リョウクは前にこの大陸を旅しているだけあって、いろんなことを知っており、雑談でニアを飽きさせなかった。

ニアは細かい溝の入った、小さな容器から白いクリームを丁寧に、スプーンのような細い棒でかき上げ口に運んでいる。それは柔らかく溶け、甘さが体に染み渡っていった。おいしいのだが、口に入るまでの時間が長い。

「どうしてこの国のお菓子は、こんなに食べづらいの？」

チューブといい、この溝にわざと入れてあるお菓子といい、すぐに食べられないように細工されている。

「この国の人々は基本的に貧乏で、糖を原料とした、お菓子を食べるしかないのでございます。そこで開発されたのが、この『食べづらいお菓子』なのです。長時間楽しみ、空腹を忘れる工夫がされております」

「それで安くて、量が少ないの？」

「そうです。たとえばこのお菓子。実は他人の身体的特徴を、ピタリと当てることができるのです」

リョウクはニアに、五本のクッキーがツクシのように並ぶ、黒い箱を見せた。

ステックタイプで、表面に文字が焼きしるされている。

「それはすごいですわね」

ニアは素直に驚いた。

リョウクが一本、黒い箱から取り出してみせる。

「このステックの表面には、ニア様のお胸のサイズはGカップとあります。正解ですか？」

「えっ？ いいえ？ 私のサイズはFのはずですけど？」

「引っかかりましたね。そんなことは、いっさい書いていない！」

「……だましましたね。あっ、ちょっと！ 何メモってますのっ！」

ニアはリョウクから、個人情報が書かれたメモを奪おうと、ぴょんぴょん跳び上がる。

しかしリョウクは、長身を利用して、紙を空高く持ち上げてしまった。これでは、背の低いニアは届かない。

「あっはっはっは。ニア様。おたわむれを」リョウクはまぶしい笑顔を見せる。絶対に渡さないつもりだ。

「もうっ！ ……あっ」

ぷんすか怒っていたニアだったが、とある集団を見て、感情が急速に冷えていった。

お菓子の国（2）

片目に眼帯をつけ、足が悪いのかつえをついている人間や亜人が、病院から出て行く。

そういえば、足先を包帯で巻いている者によく出会う。

「この国の住人は、何か悪い病気にかかっているのかしら？」

ニアは心配そうに、覇気のない後ろ姿をながめる。

「糖病でございます」

「糖病？」

「ええ。人はこういったお菓子を食べると、血糖を下げるホルモンが出ます。それが代謝異常を起こし、糖病になるのです。血糖値が高くなりますと、筋肉や内蔵にエネルギーが取り込まれないた

め、ああいった失明や足が腐ってしまう壊疽が起こってしまうのです。しかも糖病は一度発症すると――二度と元には戻らない」

「ええっ？ このお菓子が原因ですの？」

「そうですね。常にホルモンが出続けているのですから、いつか枯渇してしまうのでしょう」

「そんな……」

手に持ったお菓子を見つめるニア。これにそんな病気が発症するなんて、初めて知った。光の大陸では糖質な食べ物が少ないので、聞いたこともない病名だった。

「予防はできないの？」

「野菜を食することにより、血糖値の上昇を防ぐことができると、医者から聞いたことがあります」

「それなら、おいしいサラダを作りましょう！」

ニアは自分の得意分野なので、声を高揚させて喜んだ。

材料は持って生まれた能力を使えば、簡単に手に入る。植物をどこにでもはやす能力。これを使えば、草木のはえない道ですら、お花畑にすることができる。

ニアは能力を使い、植物をはやすと、さっそくサラダを作り始めた。リョウクもサラダ作りを手伝う。二人で作ったサラダは、お菓子に負けないぐらい、色とりどりなものができあがった。

「みなさん！ お菓子ばかり食べてないで、おいしいサラダはいかがですか？ 健康にもいいですわよ！」

ニアはサラダを並べ、人々に呼びかけた。

やはり風船の国と同様、光の大陸から来たエルフということで、珍しがって近寄ってくる。

ミルクのような白い肌を持つ、ニア目当てによってくる者もいたが、リョウクににらまれ手が出せずにいた。

子供がおいしそうな食べ物に、すぐに手を出して、サラダの入った容器を持つ。それに続いて、

次々とサラダは売れていく。もちろん、お金はもらっていない。

一番にサラダを取った男の子が、ポケットから粉を取り出し、サラサラかけていた。

ニアはその行為が気になった。

「ねえ坊や。何をしてますの？」

話しかけてみる。

「魔法の粉だよ。サラダはこれをかけなきゃおいしくないんだ」

サラダには香辛料などが、すでにかけられているが、それでも物足りないらしい。

男の子は粉をかけ終えると、シャリシャリ頬を緩ませながら食べる。

ニアはちょっとだけ男の子から粉をもらい、それを赤い舌でなめてみた。すると、お菓子の味がした。男の子は、粉にした糖をサラダにかけているのだ。

ニアは目を丸くしたが、周りの人たちも、男の子と同じように糖の粉をかけ、サラダをお菓子にしている。

「みなさん！ その食べ方では、意味がありませんわ！」

つい叫んでしまう。サラダを口にほおばっていた人々は、驚いて目を白黒させた。

「えっ？ でもなぁ。サラダだけだと、なんか味が足りないんだよ」

「そうそう。やっぱり、お菓子と混ぜなきゃ駄目だよな」

「サラダだけじゃ、まずくて食べられないわ」

健康のためだと訴えても、町の人は誰も言うことを聞かなかった。逆に文句を言い始める。顔しかめて、サラダを置いて去る者もいた。

「そんな……」

「ニア様。彼らの舌はすでに壊れているのです。病気になるとわかっても、糖分の摂取をやめられない。どんな健康的な料理を出されても――彼らは必ず糖を中に混ぜてしまうでしょう」

リョウクはお菓子を粉にして、夢中で食べる人々を、細い目で見つめていた。

その後、ニアはお菓子が食べられず、早めに国を出ることになる。糖で着色されたお菓子が、あまりにもきれいで、毒々しく感じるようになったからだ。まるで、食べてもらえるように誘っている――毒性生物に見えて

しかたがなかった。

壁の国（1）

ニアは馬の背中に座り、リョウクを待っていた。

遮光性のある、ピンク色の布を頭からかぶり、『壁の国』の門番と言い合っているリョウクをながめている。白い肌のため、太陽の光に弱いのだ。

ただ、空が曇ってきているため、まぶしさと暑さは感じなくなっていた。

「雨が降りそうですわね。それにしても、さっきから何をもめているのかしら？」

ニアは慎重に馬から下りると、幅の広い背中をなでた。ブルッと、馬の首が震える。そのしぐさにクスリと笑い、布を畳み、リョウクの元へ向かった。

近づくたびに、リョウクの怒鳴り声が聞こえてくる。ニアは聞き耳を立てた。

「いいか！ よく聞け！ ニア様はGカップに近いFカップだぞ！ これからも大きくなるお人なのだ！
それを、貴様たちはぁぁぁぁ！」

「きゃあああああ！ 何私の個人情報をバラしてますのっ！」

ニアは急いで走りだす。血液を顔まで上昇させると、リョウクを門番から引き離した。入国とまったく関係ないことでもめていたのだ。こんな話を数分間もやっていたと思うと、恥ずかしくて死にそうになる。

結局『壁の国』には入れず、城壁の上で町並みを見学という形になった。二人は城壁に設置されてある、石の階段を上る。あまり手入れされていないのか、踏面が崩れていた。

「おのれ……なぜロリ巨乳の魅力をわかってくれないんだ？」

リョウクが悔しさのあまり、親指をかむ。

「そんなもの、わからなくてけっこうですわ。もう」

ちょっとだけ声を張るニア。

階段を上り終えると、世界が開け、壁の内部が見渡せた。とんがり屋根が多く、その先に鳥が巣を作っている。碧い瞳に噴水広場が映った。

そこには、赤いペンダントをした、まるで本物のような女性の石像が、つぼを肩にかつぎ水を落としている。

「わぁ……壁の中はこうなってますのね」

歩廊を歩くたびに、ニアのスカートが広がる。長い耳が人々の声や、生活音を捕らえた。どこからか、甘い卵焼きの匂いがしてくる。

普通城壁の歩廊は、兵士が使うものだが、今は平和なので観光客用となっているようだ。胸壁に『落書き禁止』と、張り紙がある。

「リョウク。どうしてこの国の人々は、こんな高い壁を造ったの？」

ニアが両手を後ろにやり、クルリとリョウクの方を向いた。あまりに景色がいいので、気分が高揚してきたようだ。町の中央の丘にあるお城は立派で、ガラスのような素材で壁を造ってあるのか、星のように輝いて見える。

リョウクは、細い目で城壁の中をながめていた。

「敵国から自分たちを守るためでしょう。それが原因で、この国は他国とのつながりがなく、独特の文化を築いています」

「そうなのですか？ なんだか、寂しい国ですわね……あら？」

風によって前をそよぐ金髪を手で押さえ、ニアは町の路地に視線をやった。

「あっ、見て、リョウク。あの人。私と同じエルフですわ」

指さす方向には、褐色の肌を持つエルフがいた。背は小さく、黒髪で、ひげ面のドワーフを連れている。ニアと同じ女の子だ。

「あれはダークエルフですね」

「へぇ……えっ？ ちょ、リョウク？ 何をしてますの？」

リョウクが胸壁に上る姿を見て、ニアは目を見張る。

「褐色のエルフなど邪道！ 色白のエルフこそが正統派なのだ！ わかったかお前たち！」

腕を組み、リョウクは大声で叫ぶ。しかし、音声は空中で分解され、何一つ地上に届いていない。

「ひえっ？ 誰に言ってますの！ 恥ずかしいから下りて！」

ニアは、慌ててリョウクを下ろそうとした。

「ニア様。彼らに教えてやらねばなりません。何が――マニア心をくすぐるのか」

「いいから下りなさいっ！」

母親のように、ぷんすか怒るニア。

リョウクは『ニア様愛』なので、命令されてしまっては素直に下りるしかない。

口惜しそうに、見えなくなるダークエルフの背中を見つめている。

「本当にあなたったら……うん？ この臭い？」

ニアが、異様な臭いをかぎ分けた。

壁の国（2）

臭いの元をたどっていくと、黒い煙が町を濁している。

その下では、炎が踊っていた。

「大変ですわ！ 家が燃えてる！」

ニアは胸壁から身を乗り出した。

よく見ると、家の周りで鎧を着た兵士たちが、たいまつで火を放ったようだ。

火事になっているというのに、町の人々は無反応。素知らぬふりをして、商売を続けている。

「リョウク！ どうして家が燃えているのに、あの人たちは無反応なの！」

ニアは声を荒立てた。火事になれば、皆で協力して、水を運ぶのは当たり前の行為だ。それをしようとしない。

「あの燃えている家は、反乱軍のアジトなのでしょう。だから見て見ぬふりをしているのでございます」

リョウクは今回も、冷静に状況を語る。

その態度に、ニアは眉をひそめた。

「ニア様。国の制度を変えるには、内戦でしかないのです。恐らく、今の国の政策を、気に入らない者がいるのでしょう」

「それなら、壁の外に出ればいいじゃない！」

「それができないのです。この壁の国の人々は、外に新天地を求めることをしないのでございます。もちろ

ん、外から来る者も拒絶します。――不安という感情に支配されているから」

あまりに情けのない言葉。それがリョウクの答えだ。いつも冷たく、人々を見放す。

「あなたって人はっ！」

ついに穏やかなニアでさえ、感情が高まり声を張り上げた。

「――ニア様」

怒鳴り声を上げる前に、リョウクが物静かな声でそれを抑える。

「その昔、この壁の国に入ったとある女性が、壁を壊し、人々を外の世界に案内しようとしました。しかし、誰も出て行こうとしなかった。国の王が、中にとどまることを強制しているわけでもないのに」

突然の過去話に、意表を突かれ、ニアの口が閉じた。

リョウクは燃えている家を、無感情な瞳でながめている。

「そこでその女性は、反乱軍だった少年を、無理やり外へ連れ出そうとした。少年は嫌がった。腕にかみつきもした。外の世界など、想像もしていなかった。抵抗はしたが、結局兵士たちがやってきて、外の恐怖よりも、死の恐怖が勝り、少年は壁の外に出た」

燃えている家から、まるでろうそくのように、全身に火が行き渡った人間が出てきた。焦げた臭いが、ここまでやってくる。

「少年はその後、光の大陸に渡り、美しいエルフたちと出会った。そこはいい人たちばかりで、とてもいい政策を行い、何よりも、人は自由だった。女性は少年に言った。『この世界はどこまでも広がっていて、美しく、悩んでいる余裕なんてない』と。その言葉の意味が、ようやくわかった」

火が生命を奪い、黒焦げた死体が道に倒れる。

兵士たちはその人物に、やりの穂先を突き立てた。

そして、空へと持ち上げる。

「成長し、少年は再びこの黒い大陸へやってきた。あの女性に出会い、お礼が言いたかった。そして、この壁の国に帰ってきた」

リョウクはその様子を見ても、平然と話を続けていた。

ニアはもう見ていられなくなり、口を手で押さえ、町から視線を外した。エメラルドのような瞳から、透明な涙が浮かぶ。

「……出会えたの？ その人と」

「ええ。――あそこにいる、石像がそうです」

「――えっ？」

ニアはもう一度、町に視線を移した。

噴水広場で、つぼを持った女性の石像。赤いペンダントがきらりと輝き、恋人たちの憩いの場に、少年を助けた女性がいた。殺されたうえに、石像として固められ、なおも生かされ続けているのだ。

ニアに悪寒が走った。

人の容赦のない残忍さに。

「ニア様」

「……ひっ」

リョウクが目の前に立っていた。

ニアは初めて、リョウクが怖いと思った。

細い腕が持ち上がり、固い皮の指が、ニアの頬をなでる。体が震えて、それから逃げられなかった。青い空を覆った、灰色の雲が、彼の表情を隠してしまう。

「人は愚かだ。ただただ――愚かだ」

リョウクの指が、氷のように冷たい。

体温を感じない。

まるで、石像のように。

「あなたは私の理想。――私だけのモノだ」

指に、一粒の滴が落ちた。

それは空から降ってきた、雨ではなかった。

ニアが泣いていた。

リョウクを見上げ、泣き続けていた。

恩人にようやく会えると期待をふくらませ、この壁の階段を上り――絶望した少年の代わりに。

エピローグ

ニアとリョウクは、馬で旅を続けていた。

ニアはリョウクの後ろに乗り、一言もしゃべらないでいた。疲労が蓄積され、頭がぼんやりとする。額をリョウクの背中につけると、子供の頃にかいだ、懐かしい匂いがした。

――……疲れた。

ニアの思考がようやく動いた。それまでは、砂利を歩く馬の足音すら、耳に入っていなかった。

こんなに旅がつらいと思ったのは、初めてのことだった。光の大陸では皆いい人ばかりで、いかに見聞が狭かったか思い知る。外国では、価値観や生活環境が違い、光の大陸の常識が通用しない。

何よりも、女王候補であるはずなのに、目の前の幼なじみですら救えない。

「ねえ、リョウク。あなたは――この大陸の人々が嫌い？」

「ええ、嫌いです」

リョウクは、はっきりと答える。

ニアはなんとなく、その言葉を予想していた。

リョウクがこの大陸の案内を引き受けたのは、人々がいかに愚かか、女王候補に見せるため。ニアは、それを伝える役割を与えられているのだ。そして、二度と光の大陸から人を来させないようにしたいのだろう。

その意図が理解できてしまい、ニアはとにかく悲しかった。それでも、涙が枯れてしまい、一滴たりとも出てこない。

そうこうしているうちに、次の国に到着した。

「……あら？」

ニアは首をかしげた。

町に、人がいないのだ。

石造りの町で、石畳の道だが、気配がない。それに、やけに黒いハエが多い。その不気味な静けさと、氷のような冷たい風に、ニアの不安が大きくなる。

しばらく馬を歩かせていると、ようやく人を見つけた。

「これは、どういうことですの？」

人が道に倒れている。ニアは馬から下りると、その人物に近づいた。

それは、黒焦げた死体だった。

不思議なことに、服は焼けていない。大人の女性だろうか、長い髪に白いうじがウヨウヨいる。

ブンブンと、乱暴にハエたちが飛び回る。

ニアはつい手を伸ばす。が、リョウクにその腕をつかまれてしまった。

「ニア様。触れてはなりません。これは、感染症です」

「感染症？」

「ごらんください。この国はもう――誰も人がいません」

リョウクに言われ、ニアは周りを見る。

道端には、多くの死体が転がっている。

やはり皮膚だけが黒焦げており、服に焼けた跡はない。

「そんな……どうして……」

「聞いたことがあります。ネズミについたノミが人をかむことにより、感染する病気があると。その病気は人の皮膚を黒くしてしまいます」

「ネズミ……あっ」

ニアが、灰色のネズミを見つける。

ネズミは死体の足先で鳴き、天敵であるニアたちを見つけると、さっと逃げていってしまった。

それに導かれるように、ニアは走りだした。

「ニア様！」

後ろでリョウクが叫ぶ。

しかし、ニアは振り向かず、ネズミを一心不乱に追いかけた。しばらく走っていると、川の音を、長い耳が捕らえる。つんとした、異臭もしてきた。

ネズミがどこかに行き、視界から消えた。そして次に見えたのは、どす黒く染まった、哀れな川の姿。積み重なっている黒い物体は、激しい腐臭を放ち、ネズミたちを誘っていた。

それは、死体だった。

「はあ、はあ……この死体、まさか」

ニアの記憶が刺激される。子供たちが、死体の上着の色を賭けて遊んでいたのを思い出した。

「あの川から流れてきたのでしょう。ちょうどここが、曲がり角になっていたため、打ち上げられたのです。恐

らく、この国の人は、これらの死体に触れるのを嫌がり、放置していたと思われます」

リョウクが追いつき、淡々としゃべる。

「だから、死体を食べる、ネズミが大量発生した……」

ニアとリョウクを無視し、ネズミたちがガリガリと骨と腐った肉を食べている。

ニアはふらふらと、死体に近づいていく。

――……まずい。もう、ニア様は限界だ。

そう判断し、リョウクはニアをここから連れ出そうとした。

「――大丈夫。そこで見てなさい」

明るい声に、リョウクの足が止まる。

耳に、清涼な歌声が聞こえてきた。

歌は、聞き覚えがある。

リョウクがまだ子供だった頃、ニアが好きでよく歌っていた歌だ。

腐臭が漂い、気持ちが悪くなるはずなのに、なぜか落ち着き安らいでいく。

ニアの足元から、緑の植物がはえてきた。成長のスピードが速く、幼木からもう成木になっている。紅紫色の花が枝先に咲き、まるでチョウが羽ばたくように広がっていく。

――これが、ニア様の力……。

エルフの女王候補だけが持つ、巨大な魔法。

それが発動され、何もなかった石ころだらけの平地が、色鮮やかな植物に埋められていく。

芳醇な香りが苦手なネズミたちは、一目散に逃げ出した。

「この森はこれからも死体を受け入れ、肥やしとし、ネズミが苦手な植物をはやし続けるでしょう。感染症も防げるはずです」

歌い終わったニアが、振り向いた。

リョウクは、納得のいかない表情をする。

「……ニア様。どうしてこの大陸の者どもを救おうとなさるのですか？
私はあなたに見せたはずです。いかに、人間が愚かか」

「リョウク。人は愚かではありません。賢いのです。ただ、対処の方法を知らないだけなのです。

知ればきっと、自分たちで対策を考えられる、おもしろい生き物なのです」

ニアはリョウクに向かって、ニコリとほほ笑む。

その笑顔は、確かに、昔好きになった女の子だった。

リョウクは少し目を丸くしたが、すぐに成長したニアと、過去の映像が重なる。

「さっ、旅を続けましょう。無事旅を終えたら、私は本を書き、この大陸の人々に伝えます。それが、私たちの役目なのです」

「……どんな本のタイトルにするおつもりで？」

「そうですね。――『かわいいエルフには旅させよ』、というのはどうでしょう？」

ニアは楽しそうに、クルリと回ってみせた。金髪がまるで、世界を見下ろす満月に見える。

リョウクは口を緩ませると、右手の拳を地面につけ、敬礼した。

「わかりました。このリョウク、あなたをお守りすべく、一生お供致します」

「……はいっ！」

晴れ晴れとした笑顔で応えるニア。

リョウクも白い歯を見せ、笑っていた。

どこからか、瑠璃色の小鳥たちが枝に舞い降り、華やかにすんだ鳴き声を上げる。

「じゃ、はりきって行きましょう。リョウク、今日の晩ご飯はなんですの？」

「そうですね。芋のミルク煮にいたしましょう。ニア様、おっぱいからミルクを出してください」

「そんなもの、まだ出ませんわっ！ この変態っ！」

ニアのつっこみが、新しくできた森にこだましていった。

後に、光の大陸に住む、エルフの女王が書いたという一冊の本は、黒い大陸に大流行した。

おもしろい旅話に織り交ぜられた、詳しい知識は、人々の生活様式まで変えてしまったというのは――未来のお話。

了

MiRACREA ミラクリエ

第1回プチコンテスト入賞作品

2015年8月5日発行

著者：KASHI-CHARA書籍

お問い合わせ：http://mira-crea.com/guide/contact/

ミラクリエ
MiRACREA
http://mira-crea.com/

みんなの感想がどんどん反映される
アートサイト「ミラクリエ」